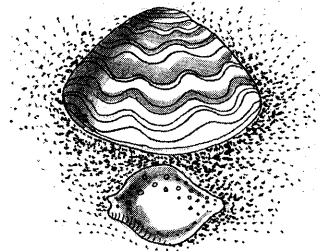


カウンセリングマインド

松井 とし



平成五年度から新たに、演習（ロールプレイ）を多く取り入れた「保育技術専門講座」が開講されることになった。従来は「保育技術」というと、ピアノを弾きながらの音楽リズムや、絵画製作、折り紙や手遊び、素話など、教師が子どもの心を引きつけるための技術といったようなものが考えられていたように思う。しかしこれからの幼稚園教育においてはこのような小手先の技術ではなく、一人ひとりの幼児の育ちを支えていくために、カウンセリングマインドを理解し、身につけた「幼児理解」こそが大切な保育技術であり、専門性であるということなのである。

社会の変化に伴って幼児をとりまく生活環境も大きく変わってきた。こういう時代に幼稚園に期待されることは、幼児が自由感に満ちて水と泥と太陽のもと、人や自然とのふれ

あいの中で、好きな遊びを存分にできる環境を保障することではなからうか。主体的な生活、人間性回復といった意味において、幼児教育はプレイセラピーであるといっても過言ではないと思う。幼児一人ひとりの日々の生活を暖かく支える人として、教師の在り方はとても重要である。「その子どもになりきることはできない」という謙遜さを持ちながら幼児の心を理解し援助する、また保護者の話を聴き相談に応じること等、心の専門家から学ぶことは多い。これまであまり自覚されてこなかったのだろうが、幼稚園の先生たちの多くはカウンセリングマインドを持っている。かがんで子どもと視線を合わせながら一生懸命につぶやきに耳を傾け、一人ひとりの子どもを受け入れようとしている。その上に立ち、さらにこれからはカウンセリングマインドを自覚し、子どもと自分とのかかわりを振り返り省察していく。その過程を大切に、人間学という視点から保育の専門性を磨いていくことが不可欠になってきているのだと思う。

講座終了後のアンケートに「先生の分かりやすい、はつきりとした話し方はとても落ち着いた」とか「全ての講師の受容的な態度に感動した。演習が多く不安だったが、先生がどんなことでも暖かく受け止めて下さったので自信を持つて参加することができた」「研修そのものも勿論だが、講師の先生方の姿勢にも多くのことを教えられた」等とあった。こうした小さな気づきや自己の振り返りが、大きな力になっていくことを期待している。